

文学教育論

島根大学 足立悦男

はじめに

大槻和夫先生の文学教育論について、『文芸教育』（明治図書）に発表された論文を取り上げながら、まとめてみたい。

私は、『文芸教育』に毎号のように執筆していたこともあつて、編集者の方から、特集の執筆メンバーの相談を受けることが多かった。そのときには、まさきさまに大槻先生のお名前を挙げていた。編集者のあいだに、大槻先生の論文に対する信頼感があつたことと、『文芸教育』の特集について、大槻先生はどう考えておられるのだろうか、そういう私自身の読者としての関心からであつた。ここで取り上げる論文は、そのようにして『文芸教育』に執筆していただいたものである。

教育学の批評としての大槻文学教育論

大槻先生の文学教育論は、一言でいえば「教育学の批評」であつた。教育学の批評とは、大槻先生が「子どもの変容を書く」という論文（196）で引用されている、坂元忠芳氏のことばで、教育実践の典型性を明

らかにする批評、という意味である。大槻先生の文学教育論には、いつも、そのような意味での質の高い批評性があつた。

〔批評性①〕 現代的視界

第一に、現代の教育状況をとらえた批評であつた、ということ。

いじめ・不登校などの現代的課題に対して、文学作品にふれることによつて、「より人間的な生き方への目を」「人権の感覚と認識を」「平和を求める心を」と訴えた、「人間として、人間らしく」という論文（211）は、文学教育に対する大槻先生の幅広い関心を示している。現代のきびしい教育現実を克服するために、人間教育としての文学教育の役割を主張しておられる。

西郷竹彦氏の提案「人間認識の力を育てる」に対して意見を述べた「『人間認識の力を育てる』文芸教育論の学力論的体系とその意義」という論文（272）では、西郷氏の提案によりながら、子どもたちの歪みやくずれに立ち向かう文芸の授業のあり方が

模索されている。

〔批評性②〕 歴史的視界

第二に、歴史的位置づけを重視されていたことである。たとえば、西郷文芸学の構想論について述べた論文「構想論—認識・伝達・創造論として」（277）においては、西郷文芸学の構想論を、西尾実の「主題・構想・叙述」（『国語・国文の教育』）の考え方を引いて、「従来の構想論では十分に意識化されていなかった、『作者の読者への働きかけ』が『仕掛』として位置づけられていることです」と述べ、西郷構想論の歴史的位置づけがなされている。

あとで見えていくが、ここでいう「作者の読者への働きかけ」は、大槻先生の文学教育論の中心的な考え方であつた。

また、「これまでの国語教育論では、認識重視が伝達重視かどとかく論が対立しがちでしたが、西郷氏の論においては、両者が不可分の表裏関係をなすものとして、統一的にとらえられているのです。私は、ここにこそ、西郷氏の構想論の卓越性を見たいと思います」とも述べておられる。

いずれも、国語教育の構想論の歴史をふまえた批評である。

〔批評性③ 教授学的視界〕

第三に、教授学的な観点をもっておられる、ということである。

「文学の授業では何を教えるのか―西郷提案の教授学的意義」という論文(280)では、「西郷竹彦氏のご提案の積極的な意義の一つは、『教材を教える』のではなく、『教材で教える』のだという、教授学的には常識化しながら、国語科教育では依然として明瞭になっていない点を、具体的に明らかにされた点にある」と、述べておられる。

その上で、文学教材の多面性と教科内容の限定の問題を、するどく提示された。つまり、文学には他の作品と代替できない独自性があり、教科内容から教材へ、という通路だけでは処理しきれないものがあるのではないか、という問題を提示された。認識方法による教科内容の体系化を提示した西郷提案に対する批評であるとともに、教授学的にみた、国語科教育における、教材と教科内容の関係について、明快な考え方を示された。これまであいまいであった問題に、すっきりとした回答を示されたのだ。

〔批評性④ 理論的視界〕

そして、第四に、理論的な批評であった、ということである。

『西郷竹彦文芸・教育全集』第13巻(恒文社、一九九八年二月)の解説「西郷文芸学とそれに基づく文芸の授業の今日的意義」(62)では、西郷文芸学の視点論による語り手(話者)の設定を評価した上で、その問題点をも、きちんと指摘しておられる。

「語り手は作者が創り出したものですが、作者も語り手も一定の共同体(社会的関係)の中に生きており、意識するとしなないとにかかわらず、一定の規制を受けています。その規制が語り手をどう規定しているのかということは、語り手自体を読み手が対象化し、語り手と共同体との関係を対象化して認識しないと見えてきません」という指摘である。これは、西郷視点論に対する、もつとも質の高い批評であった。

大槻先生の文学教育論は、このような現代的、歴史的、教授学的、理論的な視野からの、すぐれた教育学的批評であった。

「読む」過程への問いかけ

大槻先生の文学教育論は、また、「読む」とはどういうことか、という問いを内在させていた。たとえば、「文学作品の読みの過程とその指導」(60)という論文は、「読む」とはどういうことなのかを、理論的に追求した論文である。

ここでは、「文学作品の読者への働きかけ」に注目し、文学の読みの授業についての、つぎのような構想を示しておられる。

- 1 コード的解読の読み
- 2 作品世界を生かさせる読み
- 3 作品世界を意識化させる読み
- 4 作品世界を意味付けさせる読み

この授業過程は、基礎的な読みの学習をふまえて、そして読者反応(読みの過程で生じた読者の心の動き)を重視したものである。てがたい読者論的な読みの指導論といえる。

おわりに

大槻先生は、「学びつつ、乗り越えたい」(39)という最近のエッセーで、「私の目下の関心は、文芸作品の『読み』の内的な過程を、テキストと読者の相互作用の過程的メカニズムとして明らかにすることにあり」と述べられ、西郷文芸学を、テキストの装置を解明した理論として高く評価した上で、読みとは装置だけでなく、「読者の諸条件にも規定されて成立する」と述べておられる。

ここにも、西郷文芸学に対して「学びつつ、乗り越えたい」という、大槻先生らしい確かな教育学的批評がある。